

宮西達也 TATSUYA MIYANISHI NEW WONDERLAND EXHIBITION New ワンダーランド展

ヘンテコリンな絵本の仲間たち



(「ティラノサウルス」シリーズ表紙)

何度でもくり返し伝えたい 「本当に大切なこと」

『自分の気持ちを素直に表すことは、思いのほか難しい。たとえば大切な人に、「大切に思っている」と伝えること。照れくさい、言葉にすると嘘っぽいか、言わなくても察してほしいなど、はっきり言わない理由はいろいろあるだろう。(中略) そんなふうに、私たちの多くが胸の内にしまい込みがちな思いを、宮西達也は絵本にする。叱ってばかりのわが子へのあふれる愛を、どんなに叱られても大好きな母への思慕を、弱い自分を助けてくれる仲間への感謝を、幼い者が成長する喜びを、1冊1冊に込めてエンターテインメントとして描く。大切に思うことを、くり返し何度でも伝えるために。』

これは、『別冊太陽 宮西達也の世界』の中で紹介されている絵本作家・宮西達也さんの絵本作りの考え方です。やさしいタッチの絵や心温まるストーリーの作品からは、私たちの涙を誘い、生き方を考えさせられる内容が描かれています。

ここでは、宮西達也さんの作品の注目ポイントをご紹介します。



父と子の愛情の物語『おまえうまそうだな』

（ あらすじ ）

「ティラノサウルスシリーズ」の第1作目。生れたばかりのアンキロサウルスの赤ちゃんはひとりぼっち。そこへティラノサウルスが『おまえうまそうだな』と飛びかかろうとするが、赤ちゃんは「ウマソウ」が自分の名前と勘違いし、ティラノサウルのことを「おとうさん」と思い込む。戸惑いながらも父親代わりとなったティラノサウルスは、徐々に自分を慕ってくれるウマソウに愛情を感じる。でも、このまま一緒にすることが出来ないと思ったティラノサウルスは、ある日別れを告げ、ひとり静かに立ち去る。赤ちゃんを愛すればこそその悲しい別れ・・・、父と子の愛情の物語。



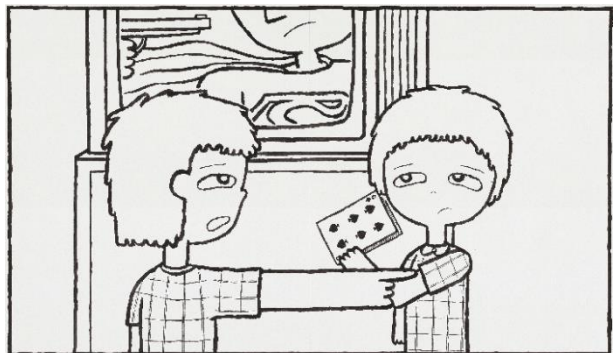
（ 原画の作り方 ）

その作り方は、版画の技法と同じ。原画を墨だけで4版（赤版、青版、黄版、墨版／タイトル分が加わる表紙は5版）で描き分け、特色を重ね刷りすると完成する。

【 ZONE 3 】

出版デビュー作品『あるひ おねえちゃんは』

絵本製作2作目で、晴れて出版デビューを飾った作品が本作。絵本を描いては出版社への持込を続けるが、何度も断られて諦めかけた頃、「へんてこだけど、預かるかあ」という編集者との出会いでこの初絵本が誕生する。タレ目の表情とやや太く震えるような輪郭線、平面的な色面処理が初期の代表的な表現形式であり、質感のあるボードの上に墨で描かれた。



【 ZONE 2 】

宮西さんが理想とする父親像『おとうさんはウルトラマン』

（ あらすじ ）

『おとうさんはウルトラマン』シリーズの第1弾。「強くてカッコいいウルトラマン。そんなウルトラマンが、笑ったり泣いたり、なんと奥さんと子どもがいて、そして子煩悩だったりしたら・・・おもしろいよね」という編集者との話し合いから誕生した物語。宮西さんが理想とする父親像をウルトラマンがユーモラスに代弁する。愛する家族のために、一生懸命にまじめに働くおとうさんはウルトラマンと同じくらいにカッコいい。でも、少し不器用で……。ウルトラマン・パパがまっすぐに子どもと向き合い、子育てに奮闘する姿がカラフルな色彩とフラットな画面の組み合わせで、小気味よく展開される。



（ 原画の作り方 ）

子どものしつけに厳しいおとうさんも泣きたい時だってある・・・そんなおとうさんの気持ちを赤や青の“色”に託して表すため、『おとうさんはウルトラマン』も特殊な作り方をしている。原画はトレーシングペーパーなどに墨だけで4版（赤版、青版、黄版、墨版）の描き分けで描かれており、印刷には特色が用いられている。クールな仕上がりの色面に温かみのある輪郭線があいまって、人間味あふれる効果を生んでいる。

ウルトラマンは、宮西さんのお父さん！！

『あのウルトラマンは、僕のお父さんなんです。（中略）
旅行関係の仕事をしていた父は土日も仕事で、よそのお父さんのように一緒にお出かけしたり、遊んだりはできない。それでも忙しい仕事の合間をぬって家に帰り、背広を着たままキャッチボールをしてくれた。「えらく感動しましたね、子ども心に。言わなかったけど。30分だけキャッチボールして、どろんこになって、また会社に戻るんです。ウルトラマンも3分間で帰っちゃうでしょ？あのおとりだなと思って「お父さんはウルトラマン」を作ったんです』

（『別冊太陽 宮西達也の世界』より）

【 ZONE 4 ① 】

「いつかカエルの絵本を作りたい」と誕生した作品 『はなすもんかー！』

（ あらすじ ）

森の中で見つけた1本の長くてきれいなもの。初めにそれを見つけたあまがえるくんとつちがえるくんが取り合い、両端に分かれて引っ張り合いの綱引きが始まる。それを見た別のカエルがおもしろそうと続々と参戦。「はなすもんかー！」と必死になるが……。セリフがマンガのような吹き出しで表現され、コミカルな効果を高めている。幼い頃、かえるの泣き声を子守唄にして寝ていた宮西さんが「いつかカエルの絵本を作りたい」と願ったことで誕生した作品。



風景の原点は子ども時代の記憶

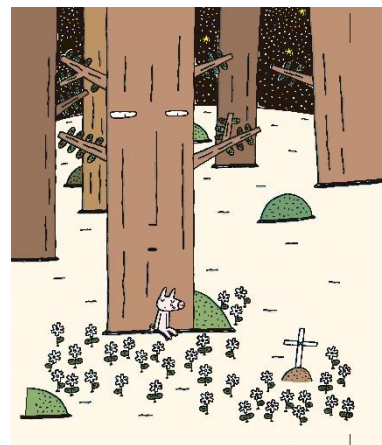
宮西さんの絵によく描かれるこんもりと茂る草やまっすぐに伸びる木々。そこには、子ども時代を過ごした懐かしい風景が根底にある。富士山が望め、湧水柿田川が流れる自然豊かな静岡県駿東郡清水町で育った宮西さん。柿田川周辺の林や野原、畑や空き地で遊んだころの記憶や感覚が強くイメージ化され、構図となって作品に立ち現れている。

【 ZONE 4 ② 】

命の尊さを気づかせてくれる作品 『シニガミさん』

（ あらすじ ）

「シニガミをキャラクターにして絵本を描いてほしい」という編集者の依頼に応え、ストレートに生と死に向き合った作品。「だれでも、じぶんが生れた日たんじょうびはしっています。でも、じぶんが死ぬ日をしっているひとはだれもいません」と意味深い言葉から始まる。はらぺこオオカミが森であつた瀕死のコブタを看病するうちに、やがて大切な存在になって……。ハラハラ、ドキドキ、そして最後にホロリと、命の尊さをあらためて気づかせてくれる物語。



（参考文献）『別冊太陽 宮西達也の世界』（2019年 平凡社）

図録『宮西達也ワンダーランド展』（2015年 朝日新聞社）

◎宮西達也 ◎円谷プロ